

体感

静岡県立韭山高等学校 二年 白井 波音

駅を出て二十分ほど歩いた川沿いに、その保育園はある。特別な一日の始まりだ。

私が「ひよこ組」という0〜1歳の部屋に入ると、カーテンの下に隠れてしまう子、全く気に留めず一人で黙々と遊び続ける子がいた。先生は、ママと離れるのが嫌で泣いている子をあやしていた。「遊んであげて」と言われたけれど、こんなに小さな子と接することがなかった私は、どうすればよいか分からず戸惑ってしまったりあえず、アンパンマンのおもちゃで遊んでいる子の隣に座ってみる。バタコさんを持って「こんにちは、よろしくね。」と挨拶したが反応はない。困ったものだ。しかし、めげずにその子の名前を呼んだり、くまのぬいぐるみになりきって話しかけたりするうちに、アンパンマンを私に渡して何かを言ってくれた。これが家庭科で習った喃語なのかと感心した。その子と一緒に遊べるようになる、カーテンの下にいる子が気になった。私自身の戸惑いや緊張が解けてきたからか、名前を呼んで手招きすると、その子は私の隣に来てちょこんと座った。驚くほど小さくて触れるのに躊躇したけれど、あまりにも可愛くてそっと頭を撫でた。その子は笑った。

こうして私の保育体験実習が始まった。朝の挨拶と体操の後、私は「波音お姉さんです」と紹介され、「いないいないばあ」の紙芝居を読んだ。私の動きに合わせて顔を隠しているのが微笑ましかった。外遊びに向かう時、手を繋ぐためには、私は中腰になる必要があった。靴を履かせようとすると、靴が私の片手にすっぽりと収まるサイズであることに気が付いた。何をしても自分とのからだの大きさを実感せずにはいられなかった。

外遊びでは、ひよこ組の子から年長組の子までが一斉に遊ぶ。朝カーテンの下に隠れていた子は、走り回るお兄さんたちの姿に圧倒されたのか、私から離れようとしなかった。そこに年長組のお姉さんが新幹線の絵の描かれた乗り物を持ってきて、「一緒に遊ぼう」とその子に声をかけたのだ。私は、自分が年長だった時、年少のペアの子の面倒を見るのが好きだったことを思い出し、その女の子に「優しいお姉さんだね、ありがとう。」と言った。ずっとしゃがんで砂遊びをしていると、普段は絶対に気付くことのない蟻の行列やカタツムリ、きれいな色をした落ち葉など、

小さな命の存在に気付かされた。

部屋に戻り着替えを済ませた子から、手を洗ってあげた。私の掌よりも小さい手は白くてふっくらしていた。昼食はご飯と煮魚とスープだった。同じ一歳でも生まれた時期が早い子は自分でスプーンを掴んでいたり、スプーンの具材もそこまで細かく刻まなくても食えることができていたりして、乳幼児の発達スピードの速さを目の当たりにした。何とか全員に食べさせ終わると、次はお昼寝の寝かしつけをした。なかなか寝なかったが、鼻筋を額の方から撫でているとやっと目を閉じ寝息をたてた。

私はこの時、私の母は、私を寝かしつけるより起こす方が苦勞したという話を思い出した。私はとにかくよく寝る子だったからだ。「すやすやと」という擬態語がぴたりな寝顔を見ていると、愛おしさが溢れると同時に、私が受けてきた愛情も感じた。きっと母は今の私と同じような表情で私の寝顔を見ていたのだろう。その私に、小さな子を寝かしつけ母性本能を自覚するまでに成長したのだ。そう思うと、一瞬にして、母というものの偉大さというべきか命の営みの不変の反復性というべきか、何だか途轍もなく大きなスケールの思考に包まれた。

先生の声で我に返った。先生は、お昼寝中、呼吸をしているかや熱がないかを十分おきにチェックするのだと言う。他の先生は、掃除の仕方を教えて下さった。昼食に使った机や椅子はすべて布巾で拭き、床は掃除機をかけてから雑巾がけをする。手足口病が流行っていたため、衛生管理は一層徹底的だ。小さい子たちは寝ている間も大切に大切に守られているということを感じ入った。

午後の実習も終わり、「ひよこ組」の子たちを一人一人抱っこしてから手を振って部屋を出た。「波音お姉さん」を全うするため笑顔でいたが、実は淋しくて仕方がなかった。控え場所で再集合したクラスメート達も同じような顔をしていた。そんな私たちに向けた先生の言葉が印象的だった。

「あの子たちは、からだは小さいけれど大きなパワーを私たちに与えてくれるのよ。」その通りだ。私の腕には柔らかな重みと体温がほんのりと残っていた。